

タイトル「**2014年度シラバス（教養教育科目）**」、開講所属「**教養教育-教養教育 全学モジュールII科目**」  
シラバスの詳細は以下となります。



学期	後期	曜日・校時	月5
開講期間			
必修選択	選択	単位数	2.0
時間割コード	20140587026902	科目番号	05870269
授業科目名	●安全で安心できる社会II(医療現場の安全と安心)		
編集担当教員	橋爪 真弘		
授業担当教員名(科目責任者)	橋爪 真弘		
授業担当教員名(オムニバス科目等)	橋爪 真弘, 新川 哲子, 田中 隆, 田崎 修		
科目分類	全学モジュールII科目		
対象年次	1年, 2年, 3年, 4年	講義形態	講義科目
教室	[教養A棟]A-33		
対象学生(クラス等)	2年次生		
担当教員Eメールアドレス	hashizum@nagasaki-u.ac.jp		
担当教員研究室	熱帯医学研究所 小児感染症学分野		
担当教員TEL	095-819-7764		
担当教員オフィスアワー	hashizum@nagasaki-u.ac.jp		
授業の概要及び位置づけ	急速なグローバル化や災害への対策が急務とされる今日の状況において、医療現場で人々の健康に関する安全と安心を維持するためにどのような対応が求められるか、総合的に理解する。		
授業到達目標	医療現場で人々の健康に関する安全と安心を維持するためにどのような対応が求められるか、自ら努力をして維持することが重要であることを認識できるようになる。		
授業方法(学習指導法)	講義を基本とする。必要に応じてアクティブラーニング手法を取り入れる。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. オリエンテーション：人々の健康に関する安全と安心</li> <li>2. 気候変動と感染症</li> <li>3. デング熱ってなに？</li> <li>4. エイズは蚊でうつるか？：蚊と感染症</li> <li>5. アフリカの暮らしと蚊</li> <li>6. 緊急被ばく時における放射線リスクと危機管理</li> <li>7. 放射線障害を受けた住民に対する支援活動の実際</li> <li>8. 医薬品開発の歴史：くすりは毒から作られた</li> <li>9. 身近な毒と、毒を克服した生物たち</li> <li>10. くすりと食べ物の境界はどこか(病気の予防と治療)</li> <li>11. 食とくすりの安全について考える</li> <li>12. 救急医療の現状と課題</li> <li>13. 災害医療の現状と課題</li> <li>14. 救急医療における臓器提供と終期医療の現状と課題</li> <li>15. 安心な災害医療・救急医療に向けて我々が取り組むべきこと</li> </ol>		
キーワード	放射線リスク、災害医療、天然毒、熱帯感染症、気候変動		
教科書・教材・参考書	教科書は用いない。必要に応じて参考書を紹介する。		
成績評価の方法・基準等	授業参加度、レポート、プレゼンテーション、試験(担当者で異なる。授業の初めに連絡予定)		

	) で評価する。
受講要件 (履修条件)	特になし
備考 (URL)	
学生へのメッセージ	



-----  
Copyright (c) 2004-2009 NTT DATA KYUSHU CORPORATION. All Rights Reserved.

タイトル「**2014年度シラバス (教養教育科目)**」、開講所属「**教養教育-教養教育 全学モジュールII科目**」  
シラバスの詳細は以下となります。



学期	前期	曜日・校時	火3
開講期間			
必修選択	選択	単位数	2.0
時間割コード	20140587027301	科目番号	05870273
授業科目名	●安全で安心できる社会II(社会科学からみた安心・安全)		
編集担当教員	西村 宣彦		
授業担当教員名(科目責任者)	西村 宣彦		
授業担当教員名(オムニバス科目等)	西村 宣彦		
科目分類	全学モジュールII科目		
対象年次	1年, 2年, 3年, 4年	講義形態	講義科目
教室	[教養B棟]B-44		
対象学生 (クラス等)	1年,2年,3年,4年		
担当教員Eメールアドレス	nishimra@nagasaki-u.ac.jp		
担当教員研究室	経済学部本館605研究室		
担当教員TEL	片淵382		
担当教員オフィスアワー	授業終了後		
授業の概要及び位置づけ	<p>科学は人間の知的探求心から進歩を続けましたが、現代では科学と社会とが密接に結び付くようになってきました。たとえば、原子力発電、遺伝子操作、再生医療 など科学によって社会生活の安全、安心が大きく影響を受けるようになってきました。</p> <p>本講義では科学に携わり始める学生諸子に、科学とは何か、どのように進歩してきたか、科学と社会との関わりはどのようなものであるのかについて議論を中心とした講義を行うことによって、理解と自分なりの問題意識を醸成することを目的とします。</p>		
授業到達目標	<p>科学の歴史と本質が理解できること。</p> <p>科学的合理性と社会的合理性に関する理解ができること。</p> <p>生命倫理、医療における情報の非対称性に関わる問題が理解できること。</p> <p>安全とリスクについて理解できること。</p> <p>社会とは何か、社会と科学とのかかわり、について理解できること。</p> <p>議論を引き出す技術(ファシリテーション) について理解し、実践できること。</p>		
授業方法 (学習指導法)	<p>チーム学習を行います。</p> <p>教科書について予習を行い、その結果をチーム内で議論しながらまとめるLTD(Learning through Discussion)方式でのチーム学習を行います。</p> <p>さらに、予習した内容に関連する社会問題についての議論にもとづくPBL (Problem Based Learning)によって、さらなる理解と問題意識を醸成します。</p>		
	回	内容	
	1	オリエンテーション	
	2	チーム学習のための準備 ・ファシリテーションとは ・チームビルディングとは	
	3	「科学の本質」はいかにして形成されたか (1)	
	4	「科学の本質」はいかにして形成されたか (2)	

授業内容	5	ネオタイプの科学の誕生
	6	医療における新たな制度
	7	科学的合理性と社会的合理性
	8	生命倫理
	9	安全とリスクの科学
	10	社会における意思決定
	11	社会とは何か
	12	私たちにとって科学とは何か
	13	発表およびディベート：原子力発電と地球温暖化について
	14	発表およびディベート：遺伝子医療について
	15	まとめ
	16	
	キーワード	安全・安心、科学、技術、社会
教科書・教材・参考書	教科書：村上陽一郎著「人間にとって科学とは何か」新潮選書、新潮社、2010	
成績評価の方法・基準等	課題：40% チームへの貢献：10% チーム議論と発表：50% 試験は課しません。	
受講要件（履修条件）	特になし	
備考（URL）		
学生へのメッセージ	この講義はグループ学習が主題の講義です。単に講師の話を聞くような受動的な態度ではなく、チームの中で自分の予習の結果や意見を述べ、人の意見を聞き、チームの意見として論理的にまとめていく中で、テーマについての理解を深めます。積極的な授業への参加を求めます。	



タイトル「**2014年度シラバス（教養教育科目）**」、開講所属「**教養教育-教養教育 全学モジュールII科目**」  
シラバスの詳細は以下となります。



学期	後期	曜日・校時	火3
開講期間			
必修選択	選択	単位数	2.0
時間割コード	20140587027701	科目番号	05870277
授業科目名	●安全で安心できる社会II(工学から見た安全安心II(エネルギーと資源))		
編集担当教員	金丸 邦康		
授業担当教員名(科目責任者)	金丸 邦康		
授業担当教員名(オムニバス科目等)	金丸 邦康, 桃木 悟, 山口 朝彦		
科目分類	全学モジュールII科目		
対象年次	1年, 2年, 3年, 4年	講義形態	講義科目
教室	[教養A棟]A-42		
対象学生(クラス等)	医学部、歯学部、工学部、環境科学部		
担当教員Eメールアドレス	kkane@nagasaki-u.ac.jp, momoki@ // ,tomo@ //		
担当教員研究室	工学部1号館3階 基礎エネルギー工学G研究室		
担当教員TEL	095-819-2532(金丸)/2528(桃木)/2531(山口)		
担当教員オフィスアワー	火曜：5校時（事前にe-mailで、予約するのが望ましい。）		
授業の概要及び位置づけ	東日本大震災後の日本のエネルギーのあり方を考えるために、日本のエネルギー事情、資源(食料、化石燃料、レアメタル、鉄など)の今後、国民生活とエネルギー需給、IPCCの報告書をめぐる環境問題の捉えかたを、安全の問題を踏まえてテーマとする。		
授業到達目標	日本と世界のエネルギーと資源の基本問題が説明できること。自分なりの問題解決策の第1歩を提案できること。		
授業方法(学習指導法)	教員提示の資料や受講者が集めた資料などに基づき、講義を展開する。		
授業内容	回	内容	
	1	概説,準備,アンケート	
	2	エネルギーとは: そもそもエネルギーとは何なのか, どのくらい重要なのかについて, それを"定量的"に議論する最低限の素養を身につけるための講義を行う。	
	3	エネルギーに関する歴史: 需要と供給について定量的に考え方を交えながら, エネルギー利用技術と社会の状況に関する歴史について講義する。	
	4	エネルギーの利用に関する2つの視点: エネルギーの変換や動力の生成等の供給側からの視点と, 電力の需要や熱の需要といった利用者側からの視点について, 講義する。	
	5	国内のエネルギー事情(1): ここ数年の日本国内のエネルギー事情に関し講義する。	
	6	国内のエネルギー事情(2): 日本機械学会動力エネルギー技術部門の動向を踏まえた最新の状況について講義する。	
	7	世界と日本の天然資源: 化石燃料を中心に分布とその移動を概観する。	
	8	最近注目される天然資源: シェールガス, メタンハイドレイド, レアメタルに関する最近の情報を集め, 議論する。	
9	食料資源と水資源: 人口問題と食料資源・水資源との関係を, 国内および世界の問題と		

	して把握する。
10	安定性の数学モデル：人に安心感を与える自然現象の安定性とは、数学的モデルにおいてどのような特性があるのか？ 物質拡散の予測モデル：有害物質の拡散現象を、どのように予測することができるのか？
11	IPCC第5次評価報告の概要 Working Group I：気候変動の概況と予測、およびその科学的根拠を講義する。
12	IPCC第5次評価報告の概要 Working Group II：気候変動の影響を講義する。
13	IPCC第5次評価報告の概要 Working Group III：気候変動の緩和策を議論する。
14	IPCCの報告書をめぐる環境問題の捉えかた：IPCC評価報告書の社会への影響とさまざまな意見を議論する。
15	持続的社会に向けての取り組み：省エネルギー対策、再生可能エネルギーの開発、原子力の現状などを議論する。
16	定期試験
キーワード	環境問題，化石燃料，原子力，エネルギーの質，食料増産
教科書・教材・参考書	担当教員が，適時資料を配布するか，または，受講者各自にdownloadしてもらったURLを知らせる。
成績評価の方法・基準等	毎回の講義出席を原則とし，定期試験（70%）,3回のレポート（30%）で総合評価する。
受講要件（履修条件）	
備考（URL）	
学生へのメッセージ	日本は，天然資源のほとんどを外国に依存しているにも関わらず，エネルギーの問題は，1973年および1979年のオイルショックの後にはあまり関心を集めてこなかった。しかし，地球温暖化の問題や東日本大震災後を経て，国民の全体の課題として広く関心を集めている。受講者は，常に新聞やテレビなどのメディアが発信するエネルギー関連の情報に常に注意を払い，疑問があったらすぐに自分で調べる態度を続けて欲しい。



タイトル「**2014年度シラバス（教養教育科目）**」、開講所属「**教養教育-教養教育 全学モジュールII科目**」  
 シラバスの詳細は以下となります。



学期	後期	曜日・校時	月3
開講期間			
必修選択	選択	単位数	2.0
時間割コード	20140587028101	科目番号	05870281
授業科目名	●安全で安心できる社会II(公害環境問題と社会)		
編集担当教員	戸田 清		
授業担当教員名(科目責任者)	戸田 清		
授業担当教員名(オムニバス科目等)	戸田 清		
科目分類	全学モジュールII科目		
対象年次	1年, 2年, 3年, 4年	講義形態	講義科目
教室	[教養B棟]B-34		
対象学生(クラス等)	医学、歯学、工学、環境 2年、3年、4年		
担当教員Eメールアドレス	toda@nagasaki-u.ac.jp		
担当教員研究室	環境科学部4階環404戸田教員室		
担当教員TEL	095-819-2726		
担当教員オフィスアワー	金曜16-17時		
授業の概要及び位置づけ	安全で安心できる環境を享受するため、公害・環境問題の歴史と現状、またそれらを考察する理論を学ぶ。全学モジュール科目「安全で安心できる社会」の選択科目。		
授業到達目標	代表的な公害・環境問題の概要を説明し、企業、行政、専門家、被害者と一般市民の役割、対立点、キーワードなどを説明できるようになることを目指す。		
授業方法(学習指導法)	基本的に映像をまじえた講義方式で行うが、口頭や毎回の質問感想用紙による質疑応答を取り入れて理解度を探りながら進める。必要に応じてプリントを配布し、OHPなどを利用して理解を助ける。		
授業内容	具体的な事例を通じて、公害・環境問題への多面的・学際的なアプローチを学ぶ。15回目はまとめ、16回目は定期試験。とりあげる事例は、予定を変更したり、順番を入れ替えたりすることもある。		
	回	内容	
	1	イントロダクション	
	2	水俣病 なぜ半世紀も混乱が続くのか	
	3	水俣病その2	
	4	カネミ油症 40年かかってわずかな前進	
	5	カネミ油症その2	
	6	チェルノブイリ原発事故とリスク社会論	
	7	福島原発事故	
	8	放射線被ばく労働	
	9	10万年の保管を要する核の廃棄物	
10	農薬問題 特にネオニコチノイド		

	11	遺伝子組み換え作物
	12	遺伝子組み換え作物その2
	13	ベトナム枯葉剤と劣化ウラン弾 戦争と環境破壊
	14	自然における人類の位置 ヒトとボノボ
	15	まとめ
	16	定期試験
キーワード	水俣病、カネミ油症、原発、リスク社会、受苦圏と受益圏、住民運動と市民運動	
教科書・教材・参考書	教科書は戸田清『核発電を問う』法律文化社2012年。参考文献は適宜紹介する。映像視聴、プリント配布を行う。	
成績評価の方法・基準等	定期試験70%、毎回のミニレポート30%	
受講要件（履修条件）	受講要件は特にない。	
備考（URL）	<a href="http://todakiyosi.web.fc2.com/">http://todakiyosi.web.fc2.com/</a>	
学生へのメッセージ	教科書を通読すること。環境科学部の環境社会学Ⅱと一部重複するが、両方受講しても得るところは多い。	





タイトル「**2014年度シラバス（教養教育科目）**」、開講所属「**教養教育-教養教育 全学モジュールII科目**」  
 シラバスの詳細は以下となります。



学期	前期	曜日・校時	月3
開講期間			
必修選択	選択	単位数	2.0
時間割コード	20140587028902	科目番号	05870289
授業科目名	●安全で安心できる社会II(破壊事故とヒューマンファクタ)		
編集担当教員	勝田 順一		
授業担当教員名(科目責任者)	勝田 順一		
授業担当教員名(オムニバス科目等)	勝田 順一		
科目分類	全学モジュールII科目		
対象年次	1年, 2年, 3年, 4年	講義形態	講義科目
教室	[教養A棟]A-13		
対象学生(クラス等)	No.3 安全で安心できる社会		
担当教員Eメールアドレス	katsuta@nagasaki-u.ac.jp		
担当教員研究室	工学部1号館5階 教官・ゼミ室504		
担当教員TEL	095-819-2599		
担当教員オフィスアワー	基本的には講義終了後講義室, またはmailで受け付ける。研究室に在室中は随時受け付ける。		
授業の概要及び位置づけ	<p>“ものづくり”は、建造するものが壊れないように、要求される性能を十分に発揮できるようにする必要がある。ところが、実際には、様々な“もの”が様々な原因で壊れ、時には悲惨な事故となることがある。</p> <p>講義では、様々な学部に所属し、将来いろいろな分野に進む学生を対象に、“ものづくり”の成果や破壊事故の実情を講義とビデオにより紹介する。また、“もの”が壊れる条件についてわかりやすく説明する。</p> <p>さらに、近年、事故発生に人のミスが関わっているとの多くの指摘がある。ヒューマン・エラーについて体験させ、人のミスを防ぐための安全確保策の考え方について紹介することを目的とする。</p>		
授業到達目標	この講義によって、実際の「ものづくり」に携わらなくても、新聞等での事故報道に対する理解が深まること、学生の身近な生活の中で利用可能なヒューマン・エラー対策の基礎的考察ができることを到達目標とする。		
授業方法(学習指導法)	講義は、パワーポイントによる座学での解説とビデオでの事例の視聴によって行う。自主学習としてレポートを課す。また、後半のヒューマン・ファクタの項目では、学生自身による体験を行う。講義中の受講態度や遅刻については、特に成績評価に反映させるので、真摯な態度での受講を求める。		
	<p>“ものづくり”の手順、“もの”が壊れる原因について講義した上で、破壊事故の事例をビデオで視聴する。</p> <p>事例によっては、講義室で簡単な実験で事故原因を体験する。</p> <p>事故には、個人の知識不足や不注意だけでなく、ヒューマン・ファクタや組織の原因が大きく影響することを理解するために、簡単なヒューマン・エラーを起こす体験を行う。</p> <p>これらのことによって、誰でもが、一生懸命やっても、優秀であっても、陥る可能性があるミ</p>		

授業内容	<p>スについて,実態と対策を考える。</p> <p>第 1 回 講義の概論, 講義の目的,"ものづくり"の成果  第 2 回 "ものづくり"の成果と破壊事故分析  第 3 回 力に対する材料の限界, 破壊とは  第 4 回 最近の事故例における発生の背景  第 5 回 事故例と事故分析  第 6 回 工学的安全システムの有効・無効  第 7 回 "ものづくり"における『安全』とは  第 8 回 "ものづくり"における安心と市民の『安心』とは  第 9 回 技術者の責任と市民の責任  第 10 回 人が犯すミスとその背景, および体験  第 11 回 想定される失敗と想定されない失敗, および体験  第 12 回 思い込みと錯覚による安全喪失  第 13 回 外部情報と脳の受容情報  第 14 回 人の理解と脳の理解, その行動  第 15 回 安心文化の醸成のためには</p>
キーワード	破壊事故, 医療事故, 組織事故, 安心・安全, ヒューマン・ファクタ, 脳科学, 認知科学
教科書・教材・参考書	教科書は用いず, 教員作成の講義資料(プロジェクト), ビデオ, 配布資料, 実験資料によって行う。 必要に応じて, 参考文献を講義中に紹介する。
成績評価の方法・基準等	提示されたテーマに対する自身で考えたことを主とするレポートのみによって100%評価する。定期試験は実施しない。未提出の課題やレポートがある場合は, 不合格とする。課題レポートでは, 自分自身の多面的な考察, 意見, 感想のみを評価し, 講義内容を記した部分は評価対象外とする。レポートでの得点で合格に達した者については, 受講態度や自主学習を考慮して, 成績を報告する。
受講要件(履修条件)	欠席は認めず, 全回出席を原則とする。やむを得ない理由がある場合のみ, 個別指導を行う。なお, 高等学校までの物理学の受講の有無は問わない。受講学生数は, 最大50名とする。
備考(URL)	
学生へのメッセージ	準備は必要ないが, 講義後のレポート作成に重点をおくことを求める。

